大阪大学経営協議会（平成２９年度 第２回）議事要旨

日　時　平成２９年９月７日（木）１３時３０分～１６時３３分

場　所　大阪大学中之島センター　９階会議室１・２

出席者　西尾総長（議長）
　　井野瀬、尾崎、佐藤、鈴木、土屋、友野、米田、三成、小林、八木、小川、河原、
　　吉川、工藤、鬼澤、下村、田島、村上、有川　各委員
欠席者　井上、大石、津賀、鳥井、野路、村尾、CASSIM　各委員

議事に先立ち、西尾議長より会議開催に必要な定足数を満たしている旨の報告及び新任の委員の紹介があった。

続いて、先般報道のあった英科学誌による「Nature Index 2017 Innovation」において本学が国内トップの順位であったことについて報告があった。

また、前回（６月１９日開催）の議事要旨については、既に各委員に照会し、内容を確定して本学ホームページに公表済みである旨の報告があった。

議　　事

【議事】

１　役員の任命等について

西尾議長から、配付資料に基づき、理事の辞任に伴い、平成２９年８月２６日付で理事１名を任命したこと及び同理事を副学長に指名したこと、並びに平成２９年８月２５日をもって任期満了となった理事について再任の形で任命したこと及び同理事を副学長に指名したことについて報告があった。

２　総長参与及び総長特命補佐の指名について

西尾議長から、配付資料に基づき、総長参与７名及び総長特命補佐７名を指名したことについて報告があった。

３　指定国立大学法人について

西尾議長から、配付資料に基づき、指定国立大学法人制度の審査結果について、将来の指定に向けた「指定候補」として取り扱われることとなった旨の報告があった。

なお、学外委員より以下のような意見があった。

・大学としてのコンセプトは十分に示されているように思う。世界屈指のイノベーティブな大学を目指すというコンセプトは、決して思いつきではなく、実績に基づいて掲げられたものであり、それが今回報道のあった「Nature Index 2017 Innovation」にも表れ

ている。自信をもって進めるしかない。相手に伝わりやすいように説明を工夫していけばよいのではないか。

4　平成３０年度概算要求事項について

三成委員から、配付資料に基づき、文部科学省に提出した平成３０年度概算要求事項について報告があった。

5　役員の報酬及び退職手当等について

西尾議長から、配付資料に基づき、平成２９年８月２５日で退任した理事の退職手当の算定時に総合的に勘案する業績勘案率、新たに就任した理事の報酬額及び新たな経営体制への移行に伴う理事特別手当の創設による役員報酬規程の一部改正について説明があり、審議の結果、これを承認した。

6　教職員の給与について

鬼澤委員から、配付資料に基づき、大阪府の最低賃金額の改定に伴う就業規則の一部改正について説明があり、審議の結果、これを承認した。

7　前回のご意見に対する取組状況について

西尾議長から、配付資料に基づき、前回の本協議会で学外委員からいただいた意見や助言に対する取組状況について報告があった。

【意見交換】

1　卓越大学院プログラム（仮称）の実施における企業との連携の在り方について

小林委員から、配付資料に基づき、卓越大学院プログラム（仮称）の概要について説明があり、続いて本学の現時点で構想中の案等について担当教員より説明があった後、学外委員から以下のような意見があった。

・企業との連携を考えると、大学の説明責任が大事であろう。様々なことに対して説明がつくかどうか、それが結局OB・OGからの協力や、資金の安定、つまり愛される大学ということに通じてくるのではないか。

・卓越性が企業にとってはどれだけ役に立つのか。大学側がいくら凄い人材だと言っても、そんな凄いレベルの人を企業は評価できない。もっとベーシックなところで役に立てば、それはアカデミアにとってはレベルが低くても、企業にとっては卓越性になる。大学と企業の連携ありきなのであれば、まずその点をきちんと押さえておく必要がある。

・産業界が求めていることが何か知りたいのなら、経済産業省と話をすればよいし、医療関係ならば厚生労働省と話をすればよい。文部科学省ともうまくやりながら、他の官庁にも探りを入れて活用すればよい。また、可能性の一つとしてODA（政府開発援助）をいかに引っ張り込むかということも考えてはどうか。

・企業との連携ということでは、実際に企業の方と議論すべきである。少し議論すれば企業の方がどんな研究者を求めているかがすぐに分かる。

・現場にいる大学の教授が、ここにいる委員たちと同じ意識になってくれたらうまくいく。ただ、それがなかなか難しい。今日議論したことは何十年も前から議論されてきた。しかし変えることができなかったから、現状がある。また、大学院は学部からのつながりで成り立っており、学部教育の段階で教員が果たす役割が重要になってくるのではないか。さらに、異なる分野をつなぐ人材、基礎と応用をつなぐことのできる人材の育成が重要と考える。

・連携というのは持って生まれたセンスである。できる人はできるし、できない人はできない。企業では配属先を変化させるなどで工夫してセンスを培う。また、新しい枠組みで新しいことをやろうとするなら、何をセールスポイントとしてやっていくのかが大事である。

・思い切ってフィールドを決めて世界からリクルートしてきた方にヘッドになってもらってはどうか。内なる視点で議論するのではなく、違うセンスを持った人、あの人なら、という人を連れてきて、給与も大きく出せばよい。日本人はシニオリティの意識やジェラシーが強いが、海外から連れてきた人ならそのような処遇も納得される。

・大学の先生は、学生に学問がこんなに楽しいものだと伝えられているのか。それが学生に伝わっているならば、学生はみんなもっと勉強しようと、博士課程に進学するのではないか。

（以　上）